

平成30年度第2回
東京都総合教育会議議事録

日時：平成30年12月13日（木）13:00～14:30

場所：都庁第一本庁舎42階特別会議室B

○中井教育長 ただいまから平成 30 年度第 2 回東京都総合教育会議を開会いたします。

会議を始める前に、東京都総合教育会議傍聴要領の改正についてお諮りをしたいと思います。

東京都総合教育会議傍聴要領について、傍聴人の傍聴機会確保などのため、別添のとおり改正をしたいと思います。

机上に配布させていただいておりますが、内容については第 4 条でございまして、「傍聴人」の後の括弧書きのところ、これまでは「報道関係者で教育長が認めるものを除く」となっておりますが、ここに「都議会議員」を新たに加えるというもので、これによって都議会議員の傍聴の機会を確実に確保するとともに、一般傍聴の 20 名枠も併せて維持するという趣旨の改正でございます。

何か御意見等ございますか。

なければ、このように改正をさせていただきたいと思いますが、よろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

○中井教育長 では、別添のとおり改正させていただきます。

本日の傍聴でございますが、NHK 外 8 社から取材の申込みがございます。それから、都議会議員の方は 2 名の申込みでございます。一般傍聴の方は、8 名の傍聴ということでございます。以上につきまして許可してもよろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

○中井教育長 では、許可いたします。入室させてください。

(報道関係、傍聴者入室)

○中井教育長 それでは、第 2 回総合教育会議の開催に当たりまして、小池知事より御挨拶を頂きたいと思っております。

○小池知事 皆様、こんにちは。都知事、小池百合子でございます。教育委員会の皆様方におかれましては、日頃より東京都の教育の充実に御尽力賜っておりますことを改めて感謝申し上げます。

そして今日は、ダイヤ高齢社会研究財団の澤岡詩野主任研究員にお越しいただいております。ありがとうございます。そして、小中高の校長先生方にもお集まりいただいております。どうぞよろしく願いいたします。

今日は二つテーマがございますが、目的は同じなので、地域の高齢者の方々に学校を支えるためにどうやって活躍していただけるかという点が一つ、そしてまた、教員の O B の方々の力をもっとお借りできないか、それによって教育の質の向上につなげられないかという点でござ

います。是非この課題について、皆様方と方向性も共有していきたいと考えております。

何よりも超高齢社会に突入している日本であり、東京でございます。そしてこれまでと違いまして、高齢であっても、先日も 80 歳を超えてプログラムアプリケーションを作ったという女性がいらしたりします。年齢関係なく、むしろ、それが蓄積となっていていい教育の提供につながるのではないかと。様々事例がございますので、今日はこの委員会におきまして御議論を頂きたいと思っております。

結局、シニアの方にとってもプラス、子供にとってもプラス、そして今、働き方改革の最大の注目が教員でございますので、そういった意味でもプラスということで、三方よしということにつながるのではないだろうかと考えております。

今日もどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、本日の議題に入らせていただきます。今、知事からもお話があったとおり、今日は二つのテーマでございます。一つ目が「地域の高齢者と共に学校を支える」、二つ目が「教員OBを学校教育に活かす」ということでございます。

意見交換の前に、出席者を御紹介させていただきます。

有識者として御出席いただいております、公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団の澤岡詩野主任研究員でございます。

○澤岡氏 よろしくお願いいいたします。

○中井教育長 澤岡主任研究員は、高齢者の地域参加に関する研究などを行うとともに、内閣府の高齢社会フォーラムの運営委員などをお務めになつております。よろしくお願い申し上げます。

次に、学校関係者でございますが、小中高それぞれの校長においでいただいております。小学校からは、西東京市立けやき小学校の高橋校長先生です。

○高橋校長 高橋でございます。よろしくお願いいたします。

○中井教育長 中学校からは、府中市立府中第三中学校の高岡校長先生です。

○高岡校長 よろしくお願いいいたします。

○中井教育長 高等学校からは、都立葛飾総合高等学校の小山校長先生です。

○小山校長 よろしくお願いいいたします。

○中井教育長 それでは、1 点目の「地域の高齢者と共に学校を支える」ということで、タブレットの資料を御覧いただきたいと思います。昨今の状況について、若干御説明をさせていた

できます。

まず、高齢になっても働きたいということについて、内閣府の調べでは、70歳か、それ以上まで働きたいという人が80%を占めているということでございます。ところが、実際に就業している率については、④を御覧いただきたいと思いますが、65歳以上では23%、ボランティア活動についても、65歳から74歳で30%程度という状況で、希望と現実にはかなりの乖離かいりがあるという状況でございます。

では、どういう活動をしたいかということでございますが、そのグラフにありますとおり、「趣味・学習・スポーツ活動」という、個人の関心、楽しみというところが圧倒的に多くて、子供の成長に関わる諸活動はかなりボランティア活動的なものの中でも低いという状況がございます。

しかし一方で、学校では高齢者が活躍できる場というのは、今お示ししているとおりです。安全管理に対する見守り、あと学習支援、これは「地域未来塾」とか、「校内寺子屋」とか、現にそういった器はあるわけでございます。それから、芝生の手入れとか学校農園とか動物飼育だとか、そういった学校の環境整備支援というものもございますし、それから放課後子供教室とか、校庭開放とか、子供の居場所に対する支援というようなものもあって、いろいろと学校に関わる高齢者の活躍の場は多様に豊富にあるという現状がございます。

その中でも放課後子供教室について実情を見てみますと、学童クラブについては、年間250日以上で午後7時までというのが一般的になっておりますが、現在の放課後子供教室は、年間の平均の稼働日数が184日で、時間は午後5時までというのが多いということございまして、共働き世帯で子供を預けたいというときに、放課後子供教室では実情に合わないということがあります。現在、待機児童が都内で3,600人いるという中で、この待機児童を解消するという点でも、放課後子供教室の稼働日数や開設時間の延長といったことが一つの課題ではなからうかと思えます。

それから、「児童に多様で魅力的な学びを充実してほしい」という保護者の声も大変強いものがあるということでございますが、放課後子供教室の実情というのは、子供を自由に遊ばせる、宿題等の自習学習というのが全体の8割を占めておりまして、多様ないろいろなお稽古事とか、英会話学習とか、そういったものは2割に満たないという状況でございます。

そういった魅力的な多彩なプログラムの事例をこの資料に掲げてございます。幾つかの自治体あるいは学校でこういった例はありますが、これを更に多くの学校、地域で広げていくというのがこれからの課題ではないかと思うわけでございます。

私からの説明はここまででございまして、引き続きまして、澤岡先生からお話を頂ければと思います。

○澤岡氏 ただいま御紹介にあずかりましたダイヤ財団の澤岡と申します。

今日は、老年学が私の専門分野になりますが、幸福な年の重ね方の条件を明らかにするこの老年学という視点から、この地元の子供、学校がシニアにとって持つ意味という視点で、今日は四つのポイントをお話しさせて頂きたいと思います。

今都市に増えておりますが、先ほど知事もおっしゃいましたようなアクティブなシニア、ただ体も、それから経済的にもそんなに問題を抱えない方の中でも、その生きがいというものを見いだせず、どのように年を、そして人生 100 年と言われる時代を過ごしていくか、不安を抱えるシニアが増えております。その中で生きがいをどう考えていけばいいのだろう、ここについて四つのポイントをお示ししていきたいと思います。

まず、ポイント、キーワード一つ目として、「『ゆるやか』に地域と関わる」ということが挙げられます。ここは、例えば 75 歳以上、後期高齢の方々でも地域との関わり方、どんな距離感がいいかというときに、向こう 3 軒両隣、ここはあえて避けたい、余り密度の濃い地域とのつながりはちょっと避けていきたい。そんなシニアも増えております。逆に言えば、挨拶程度のつながりは欲しい、顔見知りは欲しいけれども、でもね、という方が増えている中で、やはりこの「『ゆるやか』に地域と関わる」接点、いかにこれを増やしていくかが大きな課題といえます。

例えば、今日ここに載せさせていただいているデータは、町会・自治会にゆるやかに関わっている人と、全く関わっていない、この人を比較したときというデータをここにお示していますが、加入はしているけれども参加していない、は 6 割となっております。将来的にこの割合がどんどん増えていくということが言われておりまして、この参加していない人に比較して、年に数回程度でもお祭りなどに参加している人というのは、地域に対する支え合いとか、そういったような意識が高いということが出ています。

そういう意味でも、この役員をやる人ということをして遮二無二増やしていくことではなくて、例えばですが、年数回、ゆるやかに関わるシニアの方、これをいかに増やしていくかが地域を豊かにする、そんなことが一つ言えるのではないかなと思います。

そして、キーワード二つ目になります。「ちょっとの『プロダクティブ』」と書かせていただいています。ここで言う「プロダクティブ」、これは「自己完結ではないこと」ということを意味しております。誰かのために自分のできる、知識でも経験でも時間でも何でもいいので

す。そういったちょっとしたことをシェアする。貢献と言うと、今のシニアはちょっと重く感じる方も多いように思います。そういう意味では、シェアする、そのような何か活動のきっかけ、これがある人とない人、いわゆる自分で、一人で楽しかった、客船に乗って一人で世界を回って楽しかったよ、と自己完結してしまう人よりも健康寿命が非常に長いという結果が出ております。

そういう意味では「ちょっとの『プロダクティブ』」決してボランティア団体に登録して何かではなく、先ほどおっしゃっていただいたような、何か学童と一緒に遊ぶとか、そのちょっとした「プロダクティブ」というものをシニアの生活にいかに入れ込んでいけるか、これも一つ重要なキーワードなのかなと思います。

そして、三つ目のキーワードになります。皆さん、この「ジェネラティビティ」という言葉は聞いたことはありますか。これは結構昔から言われている言葉ではあるのですが、最近またこの言葉の意味というのが見直されつつあります。これは、世代間交流、世代をまたいだ力のやり取りというものが、将来の新たな価値観を作っていくという発想になっていきます。

例えば、放課後に、学習がなかなか困難な子供にシニアが勉強を教える。今日、例えば、放課後子供教室とか校内寺子屋とかいろいろな場がありますが、子供にとっては学びの機会を得る貴重な場、そして、シニアにとっては生きがいを得る貴重な場となっています。

そういう意味で、世代間交流っていいよねということが一般に認識されていることですが、この「ジェネラティビティ」の発想に当てはめて考えていきますと、その学びを得た子供が大人になります。そのとき、シニアは恐らく何か病や認知症を持っているかもしれません。そんなシニアを地域で見かけたときには、恐らく子供だった青年は声を掛けます。そして、その青年が更に大きくなって、自分が子育てをするようになる。そんなときには、恐らくその子育ては、地域とかシニアとか、そういったことに意識のある子育ての仕方をするということで、世代をまたいで、その 30 年後、その循環が生まれた結果、地域自体が新たな豊かな支え合いのある社会になっていくという、その世代間交流、一つの種まきが大きな社会のムーブメントにつながっていくという発想が、この「ジェネラティビティ」になります。

そして、四つ目のポイントになります。こちらは非常にシンプルに「身近な『地元』だから気軽に長く続けられる」という言葉で書かせていただいています。

今回の議論、アクティブシニアと指定をしております。ですが、アクティブとは言っても、30 代、40 代の頃よりは、やはりちょっと大変になることもできます。その中で、シニアに

とって続けられる、そして重要なキーワードが「身近」に「気軽」に始められること、そして、身近に気軽に始められる、そんな場ってどこだろうと考えていくと、自分が住んでいる「地元」になるのではないかなということ、このキーワード、四つ目ということを書かせて頂いております。

四つのキーワードでお示しをさせていただきましたが、そんな四つのキーワード、そういったことが含まれた生きがい生まれる、そんな「居場所」とはということで、次のスライドをまとめさせて頂いております。

人というのは、大きく分ければ人生の中で「家庭」、そして「学校・職場」、そこに続く第三の「居場所」、この三つの「居場所」を持ちながら、それがバランスを変えながら生きていく生き物だといわれております。

その中で、シニアというのはどういう時期なのかということをお示ししているのが、この次のスライド、これは東京都にもよくいらっしゃると思いますが、企業退職をされて都市郊外のベッドタウンに住んでいるようなシニアの方の三つの「居場所」の移り変わりというものをお示ししたモデルの図になります。

ここで見て頂きたいのは、青年期、これは第二の居場所、学校というものが非常に大きくなっていきます。そして、成人期を迎えますが、そこで学校に変わってくるのが職場という第二の「居場所」になります。ここで何年過ごすのかと考えますと、今、雇用延長などもありますので、長い方では 40 年、45 年、こんな長い時間を第二の「居場所」、この職場が大きくて、第一の家庭、ここを振り返る間もなく過ごし、第三の「居場所」、これは生きがいというところに直結してくるような三つ目の「居場所」、ここを持たないまま 40 年、45 年過ごすシニアというのが増えております。

そして迎えた定年退職、いきなりある日、この第二の「居場所」、職場というものがなくなってしまう。そこから高齢期、どんどん長くなっていきます。ここをいかに豊かなものにするかと考えたときに、この三つ目の「居場所」をいかに新たに作り上げていくか、これが大きな課題といえます。

そんなシニアにとって生きがい生まれる三つ目の「居場所」、これはどんな場所なのかというと、さっきのお話させていただいたキーワードになります。「ちょっとの『プロダクティブ』」でいいのです。プロダクティブで、そして「ジェネラティビティ」の生まれる第三の「居場所」を地元を持つこと、これが人生 100 年をシニアにとって豊かに生きていく重要なポイントと言えるのかなと思います。

ですが、特にその企業退職者が中心になりますが、やはり体もまあまあ、お金もまあまあ、ということで、大きな困りごとを抱えていない、下手をすれば地域でそのまま埋没してしまいがちなシニア、新たな「居場所」を見つけ出そうと動き出さないシニアというのも増えているのが都市の現状になります。

ということで、まとめに入らせていただきたいと思います。

今、地域参加、地域に関わりましょう、それから、ボランティア、地域貢献などという言葉がシニアに向けてお話しされています。教育庁のデータにも幾つかお示しいただいたのですが、今のシニア、特に団塊世代よりも若くなればなるほど、これを重く感じるシニアという方も増えております。そういう意味では、何か重いイメージではなくて、新たな見せ方、ゆるやかで、マイペースで、そしてここも大事です。自慢できること、これは言い換えれば、社会的意義が人に、そして自分にとって分かりやすいような関わり、そんなことを何か動機付けとして地域の関わりというのを探していく必要があります。

さらに言えば、今のシニアは、子供との関わり、学習支援とかそういうところに関わるシニアというのが余り増えないというお話もありましたが、実際関心がないかといえば、そうではありません。子育て支援、ジェネラティビティを否定するシニアはいません。その中で、やはり壁になっているのが子育て支援、学習支援と言ってしまうと、自分にはできない、何か特別な経験とか資格を持たなければいけない、もっと言えば、きっかけがつかめない、こんな人も少なくありません。そういう意味では、そういったシニアに、何か教育歴とか子育て経験ではなく、生きてきたあなたの人生そのものが特技になっているのですよ、こういった動機付け、働き掛けというのにも必要なのかなと思います。

さらに言えば「徒歩圏・自転車圏」「地元」に自分の身近な「居場所」というものを見つけていくことは、自分の終の棲家になる、その地域自体も豊かなものになっていくということで、自分もハッピーですよ。

では、どんなところがいいのだろう、どんな関わりがあるのだろうと考えていきますと、まずは課題です。

既に地域で活躍しているシニア、ここを学校の現場に何か巻き込んでいくというのは、恐らく皆さん大変です。これ以上のことをお願いすることは難しいと思います。

今、課題は、関心はあるけれども関わっていないアクティブシニア、そんなシニアを巻き込んでくためにどんなことが求められるのかなということで、「地元」で自慢できて、ゆるやかに「プロダクティブ」かつ「ジェネラティビティ」の生まれる「居場所」、こんな「居場

所」をシニアの人たちに提供していくきっかけを作っていくということで、では、そんな場所はどんな場所なのだろう。私がいろいろ地域でフィールドワークをさせていただく中で感じるのが、シニアにとって一番身近な小中学校、それから学童クラブ、そういったようなところが魅力的な「居場所」になっているのかなということです。

でも、シニアにとって学校という場は、身近ではありますが、敷居が高いところではあります。なので、学校にいきなり来てくださいと言うのではなくて、シニアが入るために何か仕掛けというものを学校という場につくると、つまり子供にとっては第二の「居場所」、シニアにとっては第三の「居場所」、それが学校というところでつながっていくと、さっき知事はシニア、子供、教員にとって三方よしですというお話されたのですが、さらに加えれば地域にとっても、四方にとってすばらしい地域づくりの循環が生まれていくのかなと感じております。どうもありがとうございます。

○中井教育長 澤岡先生、ありがとうございました。

引き続きまして、学校現場からの声ということで、小学校の高橋校長先生からお願いいたします。

○高橋校長 けやき小学校の高橋でございます。現場の様子ということで、本校の放課後子供教室や学童クラブなど、放課後の子供たちの居場所に関わる事業の様子、さらに発展させるために感じていることを申し上げます。

放課後子供教室は、学校施設を利用している地域の方々に組織する協議会のメンバーが、本校では中心となって運営しています。その多くは、澤岡先生の言葉にありますように、身近な地元の昔から地域で活躍をし、年齢を重ねてきた高齢者の方々が中心です。

以前から放課後子供教室として校庭を使って遊び場開放を行ってきましたが、一昨年からは毎週水曜日に学習機会の提供として、英語、習字、ヨガ、ものづくり、ダンスなどの学習活動の機会提供を始めました。その内容は、協議会のメンバーの特性を生かしたものになっています。

当初は、放課後の学習活動に参加する場合には学童クラブはお休みをすることになっていましたが、昨年度から連携を始めて、放課後子供教室を終えた後に学童クラブに行ける体制ができました。

今後、事業の充実を図る上で、課題が二つあると私は思っています。一つは新たな人材の確保、二つは活動全体をコントロールする専門家の不在です。

今行っている学習教室の指導者は、苦勞しながら自分の地域から見付けた方もいらっしゃいます。協議会の方々は地域にお住まいで、きっかけがなく埋もれ、お力があり余裕のある高

齢者の方々に協力をしていただければ、より充実した活動ができると考えています。

そこで、学校と地域のシニアの方々などの人材の集約ができるワンストップの窓口のシステム、さらに、広報及び活動に発展させるために専門のコーディネーターが欲しいと願っています。このようなことがかなえば、地域において意欲のあるもののきっかけがない、先ほど澤岡先生のお話にありましたように、高齢者の皆様へのきっかけづくりにもつながると思っていますし、放課後子供教室を更に充実できると考えています。

最後ですが、加えて人材の有効活用ということを考えれば、現在行われていませんが、放課後子供教室と学童クラブ双方の人材を有効に活用することで、より内容に深みが、また、子供たちにとって充実した時間が過ごせると考えています。

いずれにしても、今後の子供たちの放課後の居場所づくりの充実のためには、専門家のコーディネートの下、地域の高齢者の皆様のお力をお借りすることが、私は最も現実的かなと考えております。

以上でございます。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、ここからは御自由に御意見を頂ければと思っておりますが、教育委員の方々、いかがでしょうか。

○遠藤委員 先生方、ありがとうございます。東京都の教育委員会として、基本的に地域との共生ということを教育施策として掲げているわけでございますが、地域との共生の具体的な方向としては、地域の高齢者との共生ということになってくるかと思えます。

私自身、もう 70 歳過ぎの高齢者でございますが、いろいろな経験で、今先生からも御指摘がありましたけれども、町内会活動をしておられる熱心な高齢者のタイプと、それから、企業戦士といいますか、忙しくてなかなか地域に関わってこられなかった、この二つのタイプが地域の高齢者にはありますね。私自身も、町内会の副会長という立場で広く学校の先生方と一緒に地域活動をしてきた立場と、それから、経済同友会の学校と企業の交流活動の一員として学校現場に出かけていくという、地域で関わる高齢者と、企業で忙しいけれども学校と関わる、この二つの立場でやってきました。

その二つの経験からしますと、高橋校長先生が御指摘のような形のまとめ役が絶対必要だということも認識しておりますが、ただ、プラスマイナス両面あるなと思っております。

プラスはもう先生から言われたとおりなのですけれども、マイナス面というのは、学校の先生はしょっちゅう変わるのですよね。そうすると、特に校長先生が変わると、今まで我々と

一緒にやってきたことがごろっとひっくり返されるということもある、それは話し合っ解決していくことも多いのですけれども、それで嫌気が差して辞めてしまう人もいます。あるいは、高齢者というのは、私もそうなのですけれども、わがままなのですよね。ですから、学校の先生が戸惑うというようなマイナス面も出てくると思います。

ただ、トータルで考えれば、先生が言われたような対応をしていくことはプラスが相当大きいと思いますので、我々としても、地域活動の中でいかにして学校の手助けをしながらプラスをどう大きくしていくかということを考え、教育委員会としてもそういう手助けが、コーディネーターの要請とか、そういった面でできればなと思っております。以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

○秋山委員 澤岡先生の、「ゆるやかに」、それから、「ちょっと」、「気軽に」というのが、私はいいお考えだと思います。

そのためには、高齢者が、気軽に、ゆるやかに、ちょっと来られる居場所づくりをどこにするか。それが学校の中に設置できれば、気軽に来られますし、また、高齢者が自然に放課後子供教室の子供たちと触れ合うようなことができればいいのではないかと思います。

高橋先生がおっしゃったコーディネーターもとても大事で、そのコーディネーターを高齢者の方に担って頂ければ、また地域とつながっていくのかなと思いました。

以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

○宮崎委員 ありがとうございます。実は、午前中の教育委員会で、児童・生徒の支援をするガイドブックを作るという議論をいたしまして、問題が出てしまって深刻化してからの対応となる前に、3段階で早期発見をする。それよりもっと前に未然防止で、不登校とかいじめとかいろいろな問題が出ないようにするためには、まず居場所づくりが大変大切。学校が楽しい場であって、正に自分の居場所であるという状況を整えなければならない。しかし、全てを一人の教員が担えるかという、なかなかそこまで完璧に、学習の教科の内容も教え、子供の生活も見て、何もかもというスーパー教師はそんなにたくさんいらっしゃらない。こういった場合に、私は、その学校に行くといつも高齢者の方がクラスの中にいらして、何かと私たちの話を聞いてくれる、面倒を見てくれるというような存在があるだけでも、非常に意味があるのではないかと考えています。

実は、犯罪学では、犯罪抑止の最大のポイントは目なのです。見守る目があると抑止効果は非常に上がる。いじめとか人間関係とか、そういうことをいつも見ている人生の達人がいて

くれるというのは、非常にメリットではないかと思えます。

学校の中に、地域の人材を入れるというときに、何かスキルがないと入っていけないとか、学習の支援の何か特別な経験がなければいけないとか、英語が教えられるとか、そういうことになりがちなのですが、そうではなくて、ただいてくれるだけでいいという存在も大事なのではないかと思うのですね。そのときには、先ほどコーディネーターのお話が出ましたけれども、専門的な技能をどうまとめていくかだけではなくて、今日はどのクラスにどこの人が来ているということを把握するだけの簡単なコーディネーターでもいいと思うのです。

もう一つのメリットは世代間交流という一種のカルチャーショックから学べることが多いという点です。核家族化が進み、少子化が進んでくると、祖父母の世代と触れ合う時間というものもなかなか確保できなかったり、異なる世代の全く違う発想に触れて驚く機会というのも少なくなったりいたしますので、いらしてくれるだけでいいという存在感、こういう形で子供たちの心の健やかさを見守る役目を果たしていただく仕組みを作ることも考えていく必要があるのではないかなと思っております。

○中井教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○高橋校長 実は、居場所づくりの話で、本校にちょっとした中庭があって、私着任したときに、ここを地域の人たちの憩いの場にできないかなという思いがあったのです。御高齢の方も含めてですけれども。そのときに、どうしても難しかったのが、それを誰がコントロールをするのかというところで二の足を踏んでしまった。もしもそこに水先案内人ではないですけれども、そういう方々がいて、そこを拠点にいろいろな活動ができるような、いわゆる先ほど申し上げたようなコーディネーターみたいな方がいると、活動が一気に進んだのではないかなと思っていました。今でもやりたいなという思いはあるのですが、それを教員に担わすことはちょっと難しいなということがあります。

学校は、先ほどお話があったように、いろいろな方々の拠点になっていける施設だろうなと思いますし、特に小学校は小さな学区域になっていますから、そういう役割を将来的に担うためにも、やはり何か制度構築ができればありがたいなと思っています。

○中井教育長 澤岡先生のお話の中で、学校は敷居が高齢者からすると高いということで、それには何らかの仕掛けづくりが必要だというお話がございました。澤岡先生のお考えになるその仕掛けというところの具体的な中身をお話いただければと思います。

○澤岡氏 今正に私、手を挙げさせていただいたところがそこでして、実は、地域でいろいろ

な活動団体がありますが、今大きな悩みが、新しい人材が入ってこないというのも一つなのですが、もう一つ共通するのは、常設で持てる活動拠点がないというのが、皆さん大きな悩みであったりもします。

そういう意味では、そういう方々はマネジメント能力もあり、そして、地域のことも御存じです。なので、今高橋校長先生がおっしゃったように、何か校内の中に空き教室とか、そういったところの活動拠点として使ってください、でも、子供たちが来たらこういう対応をしてほしいとか、こういうマネジメントをしてほしいということで、そういう仕掛けを作っていくと、その活動に関わるシニアがまた自然に学校に通ってくる。何か周囲から無理矢理動機付けして学校に行きなさいとやらなくても、自然にシニアがいて、そして、先ほど宮崎委員おっしゃいましたが、いてくれるだけ、正にシニアが廊下でうろうろして「おはよう」と言ってくれるような、そんな好循環が生まれてくるのかなということをちょっとイメージとして感じております。

○中井教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○山口委員 澤岡先生に質問なのですが、私、健康とかスポーツの専門ですけれども、高齢者もそうなのですが、健康とかスポーツはやらせようと思うと、声を掛けなくても来る人はたくさんいるのですが、もっと本当に必要としている人になかなか声が届かないようです。

ですから、先ほど言われた教室に来てくれるような方々は、多分もう来ている。協力して下さっているのではないかと。でも、本当に発掘したい人材は、なかなか声が届かない人たちで、そういう人たちは実は居場所もなくて、困っているというか、なかなか生きづらさとかを感じていらっしゃる、そんな人たちを引っ張り出すといいますか、出てきていただくやり方とか仕掛けはございますでしょうか。

○澤岡氏 今現在、実際モデルとしてやらせていただいているのですが、待っていても来てはくれない人たちだという理解で、まずは生涯学習の学びの場などでも一つお話しさせていただいています。その中で一つのやり方が、そういう人たちは別に閉じこもっているわけではなくて、某カフェチェーンに朝から本を持って行ってずっと1日中読んでいるとか、スポーツクラブには行っているけれども誰とも話さないとか、コンビニとかもいろいろありますが、そんな場には既に出ている。そういった場で何か、正にちょっと格好いい、社会的に意義があって、自分が格好いいシニアになれるというような何かを、動機付けをして、働き掛けをして、PRをしていくというのは、もしかしたら今まで意外にやられていなかった。既にいる場にこっち

が出向いて行って仕掛けるという考え方、そして、学校に引き込んでいくという考え方がこれからは求められるのかなというのは、今感じておるところです。

○中井教育長 ほかにいかがでしょうか。

○北村委員 ありがとうございます。居場所を作るというのが非常に大事だなということを改めて強く感じました。学校の立場で、学校が地域にとってある種の居場所になっていくこと、高橋校長先生もそういうことを仕掛けられたとおっしゃっていましたが、他方で、学校の安全、外から関係のない人が入ってこないように、子供たちの安全をどう守るか。人には入ってほしいけれども、学校の安全も守らなければいけないということで、非常に難しい御判断だとか、管理運営があるのだと思うのですけれども、その辺りでどういう工夫が必要なのか、あるいは何か工夫されていることがあれば教えて頂きたいなと思ったのですけれども、いかがでしょうか。

○高橋校長 いろいろな考え方が当然あると思っており、学校の安全は守らなければならないものだと思っていますが、顔見知りの人たちが学校にあふれることが、逆に言えば、私は学校を守ることにしていると思うのですね。お互いに知り合っているわけですから「あ、誰々さんね。今日も元気でしたね」。そして子供たちもその人たちと同じような関係ができれば、学校だけではなくて、地域に出て行ったときにも顔見知り、そうすると「この人はいつも学校に来てくれている人だから、僕たちのことを私たちのことを助けてくれる人なんだ」という思いになると思うのです。

ですから、私は、逆に学校を開放して行って、そういう方々が増えれば増えるだけ、地域で子供たちの安全というのは守られるし、学校での安全ということも確保できるなど考えています。

○中井教育長 先ほど私の説明でも申し上げましたけれども、こういう地域での子供を受け入れる場が充実してくるということは、子供や地域、学校にとっていいというだけではなくて、女性の社会進出においても大切。よく小1の壁、それから、小1というだけではなくて、中学年、高学年の子供もやはり「鍵っ子」のようになることに対する保護者の不安というものもあるわけですし、そういう面で、放課後子供教室が、先ほど申し上げたとおり大体5時ぐらいで終わってしまう、あるいは、稼働日数が週数日ということで全部やっていないというような現状が、学童クラブと同じようになっていくと、子供の預かり機能としてしっかりすると思います。

先ほど高橋校長先生がおっしゃっていましたが、多様な人材を共有することにもなるということで、そういった社会全体の観点からした、この学校を使った拠点づくりといいます

か、放課後子供教室の充実というのは重要なのではないかなとも思います。

では、知事にあと御意見、まとめと両方お願いいたします。

○小池知事 活発な御意見、そして、御質問ありがとうございました。また、プレゼンテーションをありがとうございます。

キーワードは「居場所」かなと、改めて思いました。子供にとっての「居場所」、それから、シニアにとっての「居場所」ということなのだろうと思います。この「居場所」をうまく確保する物理的な場所が学校であると。あと、それを動かしていくには人が必要だと、コーディネーターであったり、先生は「協議会」とおっしゃいましたけれども、それをどうこの人生 100 年時代にもう少しグレードアップするかということが必要なだろうと思います。

今、町会とか自治会などもかなり高齢化しているのですが、一方で、それをお手伝いする方々を「プロボノ」と呼んで派遣をしております。「公共善」という意味のようなのですが、例えば、ホームページを作るのがうまい人が、お手伝いをちょっとしてくださるだけで、そういう形でいろいろ御協力いただいて、自治会活動もその「プロボノ」のおかげで若干活発になりつつあるという状況ですが、これはそのまま学校にも使える考え方かなと思います。

また、私、豊島区で聞いている例なのですけれども、それぞれ得意のスキル、例えば、商社マンで海外に駐在していらした方、英語が得意だとか、スペイン語が得意だとか、いろいろスキルをお持ちの方が、子供たちにそれを教えたり、それから、お琴を教えたりとか、大体 7 時ぐらいまでやっているそうなのですね。そうすると何が起るかというと、教育長がおっしゃいました、働く女性の皆さんが、子供たちを 7 時ぐらいまで見てくれるので、安心して仕事ができ、ちゃんと迎えにも行けるというようなことで、いろいろな面でプラス。三方よし、四方よしどころか、五方も六方もいいのかもしれない。

ですから要は、コーディネーターをどういう形で確保していくのかということです。例えば昔エンジニアをやっていたという方が、いろいろな実験のようなことなども、学校の先生もさることながら、そうやってビジネスとしてやっていらした方から話を直接聞くというのも、非常に子供たちにとってもプラスだと思うのです。そういう元気なシニアを、何曜日には誰さんに来てもらって、何時から何時まではどうしてこうしてという、そういうマネジメントの意味でのコーディネーターだと思うのですが、これは工夫する価値はすごくあるかと、改めて思ったところです。

結局、豊島区の例もそうなのですが、子供たちをそうやって安心して、そして、かつそういうスキルも教えてもらって、学校で夜の 7 時ぐらいまで過ごして、その後、うちでみんなで御

飯を食べるというようなことをやって。要は、女性も働くようになった結果税収が増えたというのですね。両方が働くと、103万円の壁など突破してしまうので、ということを区長が大変自慢して言っていましたけれども、そういうプラス効果なども、子供たちもそれで楽しく学んでいるという話だと思います。

ですから、要は、その突破口をどうやって進めていくか、一つモデルケースなどももう既にあるわけですから、そういったところから都内に広げていくというのも一つだなと、改めて思ったところがございます。

小学校で行っている放課後子供教室の稼働日、それから、開設時間の拡大で学童クラブに合わせていくと、学童クラブの待機児童を減らすことができるということですね。それから、放課後子供教室の活動に、今申し上げたように、例えば、芸術とか語学とか、様々な活動をさらに加えることで、それは保護者の方、それから子供たちのニーズにもかなうということだと思います。

高齢者の活動拠点を学校の敷地内に設置をするというお話も高橋校長先生から頂きました。地域の高齢者の多様な力をお借りしながら、こうした取組を積極的に行っていければと思っております。

御議論ありがとうございました。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、二つ目のテーマに入らせていただきたいと思います。「教員OBを学校教育に活かす」ということでございます。

意見交換に入る前に、また私から状況の御説明をさせていただきたいと思います。

東京都の教員の年齢構成が資料1ページ目の①でございますが、2こぶラクダになっていて、今大量退職の時期にあるということで、児童数も全国とは違って、東京においてはまだ増えているという状況であります。

一方で、言われているとおり、教員の長時間労働ということが大きな問題で、そこに挙げているパーセントは過労死ラインを超える教員の割合ということで、非常に深刻な状況にあるということでございます。

そういう中で、大量退職を考えると、若手の人材が教員を志望してどんどん入ってきてくれることが必要なのですが、現実には、学校の職場が非常に、若い人たちからするとちょっとブラック的に見られているというのもあるとあって、年々応募者は減少しているというのが現実でございます。

こういう中で、では、教員のOBはどういったことを学校教育の中で今現在行っているかという、大きく分けて四つございます。

授業、要は非常勤講師として授業に入っていく。当然、スキルも経験もありますので、お手の物というところがございます。

また校務というのがございますが、そればかりではなくて、現役の教務主任だとか生活指導主任にかわって、授業時数の管理、調整だとか、避難訓練の計画作成だとか、そういった校務全般をOBがやるということも行われます。

さらに、若手教員に対する人材育成、指導ということにも長けています。

それから、部活動も経験がございますので、非常に生徒の指導がうまいというようなことで、各方面で教員OBの活躍の場があるわけがございます。

これを広げていくことが、現任教員の業務軽減、そして、学校の教育の質の向上につながると考えられるわけがございます。

しかしながら、実際に教員のOBがどれぐらい任用されているかということについては、61歳で78.6%ですが、65歳になると43.1%まで減ってしまう。さらに66歳から70歳では全部で516人、これはパーセントに直しますとほんの数パーセント、5%を切るような、そんな状況でございます。

であるわけなのですが、65歳の再任用、非常勤の職員の人にアンケートをしたところでは、まだまだ働きたいという人が8割いる。けれども、希望する働き方としては、フルタイムではなくて、週3日とか週4日、それぐらいの感じがほどよいということですし、業務内容も、授業が得意な人は授業をやりたいとか、その他の補助的業務をやりたいとか、いろいろ時間と業務内容についてはバラエティさを持たせることが必要なのではないかという状況が、これから読み取れるわけがございます。

現状については、こういったところがございます。

それでは、学校の先生のお話もお伺いしたいと思います。中学校の高岡校長先生、お願いします。

○高岡校長 先ほどの「地域の高齢者と共に学校を支える」というのは、自分なりの解釈だと、地域の知恵を学校に活かすという発想かなと感じています。今度の「教員OBを学校教育に活かす」というのは、培ってきた学校の知恵を学校に活かすという発想かなと思っています。

東京都中学校長会が全中学校長会からアンケートをとったうちの一つの質問項目のことを御紹介します。「教育課程の実施に必要な人的又は物的支援としてあなたの学校が必要としてい

るものは何か」複数回答だったのですが、第1位は部活動支援 77.4%、第2位が学習支援 75.5%でした。こうした人的支援に現在PTA等が関わっているのが部活動支援で 20.8%、学習支援が 35.8%しか現実としては関わっていない。ということは、特に専門的知識を持った人的支援が十分確保されていない状況が明らかになっています。

特に部活動については、指導ができる顧問の確保というのは各校とも非常に苦慮している現実があります。実は、私も前任校で、ある部の顧問が異動になり非常に困っていたケースがありました。そのときに、65歳で教員を辞められた方に来ていただいて、本当に助かりました。経験豊かな元教員から、特に若い教員、学ぶことが多いなと思いました。例えば、子供の接し方とか、声掛けのタイミングなどのいわゆる生活指導の技とか、また、部活動と校務とのバランスの仕事の技とか、また、毎回練習メニューを送っていただいていますから、実際には負担軽減にもつながっていて、結果的に若い教員だけでなく、学校全体が非常に助かったということがありました。

そういう意味でも、人材育成負担軽減の意味でも、培われた学校の知恵を学校に活かすということは今求められていることではないかなと感じています。

以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

引き続き、葛飾総合高校の小山先生、お願いします。

○小山校長 よろしく願いいたします。葛飾総合高校の例をまず一つ挙げさせてください。

本校では、68歳になる理科の教員でした元高校の教員が勤務しております。実習支援員という立場ですので、活動の内容は実験の準備と補助、後方活動中心ですけれども、文書業務となります。この方は、本務を離れて時間をうまく使って、若手の研究授業にも参加してくれています。そして、若手がその授業の後、アドバイスをもらいに行っていると。また、しっかりとアドバイスをしているという、そういう事実がございます。学校として非常に助かっています。

この事例からも、定数外として、やはり力量のある教員OBの活用というのは、若手教員の育成に寄与するものでありますし、また、文書業務等の教員の業務経験にも大いにつながっていくものと考えています。

今まで学校というのは、特に高校かもしれませんが、高齢者の方とのつながりは求めていましたので、交流はしています。ただ、その交流や共存はしていても、活用というところまではなかなかお話が進みませんでした。高齢者の方々、特に教員OBの知識、経験を活かす

場、これは学校にありますので、是非活用したいなと考えているところです。

また、活用の際にたのめですけれども、やりがいのある業務を提供するといった、活躍の場を教員OBに拡大していく必要があります。また、モチベーションの向上に向けて、働きやすい環境、働きたい環境を整えることも必要だと思います。例えば、職住近接への人の配慮、また、働き方としては、小論文の指導だとか、探究、課題研究の指導であるとか、先ほど部活動の話もありました。特有分野に特化したような任用区分の在り方もよろしいのかなとも思っています。

また、配置においても柔軟に配置していただければと思います。例えば、複数の学校にて、授業であるとか、業務のお手伝い、補助ができるような体制、配置。また、高校の教員が地元の小学校や中学校に出向いて、高校だけではなくて、小学校、中学校にも行って、小学生、中学生の指導ができるような機会を設けるといったことなどが考えられるかなとも思っています。

そのような意味で、学校には様々な課題がありますけれども、その課題の解決のためにも、学校は今こういう人材が必要なのだというそのニーズをしっかりと確実に捉え、また、それを発信していくということが必要ですし、また、そのニーズに応じていただける形で教員OBを配置していただけると、学校は非常に助かると考えております。このことが教育全体の質的向上と、あと、先生方の業務の負担軽減にもつながると考えているところです。

以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、高橋校長先生、お願いします。

○高橋校長 教員の在校時間の長さが指摘されていて、その改善に学校は非常に努力をしています。しかし、多くの教員は、教育の質を低下させてはならないと考えています。教育は、日本の将来を作る根幹を成すものだという気概を持って皆働いているからです。そのために、時間を意識しながらも身を粉にして働く教員が多くいます。

そのような中で、本年度、都内小学校長を対象に行った調査で、疲弊している教職員を支援する方法として、望むこととして最も多く回答があったのが、非常勤の教員の全校配置、支援員、補助員など、教育指導に携わる人材の配置でした。

現在、区市町村によっては支援員などの制度がありますが、自治体によって差があります。本校に1名の男性の支援員がいます。65歳を超えた元中学校の体育の教師です。現在、小学校1年生の支援を週3日から4日、1日5時間してくれています。体力調査の前などは、その専門性を生かして、例えば、分かりやすくボールの投げ方を指導してくれたり、鉄棒の指導で

的確なアドバイスをしたりするなど、日常の指導支援のほかに専門性を活かす場面が多くあり、今では本校になくはない存在となっています。

特に、現在1年生には本年度の新規採用教員もおり、若手教員の育成支援にも力を発揮しています。本校だけでなく、様々な教育課題がある学校では、若手教員の育成は大きな課題です。

国ではスクールサポートスタッフという制度を始めていますが、これは、例えば、印刷などの教員の事務量の軽減を意図したものです。それとは異なり、教育指導への支援を再任用を終えた65歳以上のベテラン、元教員が行い、副担任や専科として働く制度が構築できれば、私は若手の教員育成や専門性の高い指導、教育への教育指導に関わる業務軽減など、学校が抱える課題に対応できると考えています。

若手教員の質のことを申し上げれば、一番大きな課題は、私は教員採用試験の倍率低下だと思っています。原因は、教員の職場環境の厳しさなどが伝えられていることがあります。

例えば、全国をリードする形で、東京都が独自にベテランを活かした非常勤の教員や講師の配置ということを行えば、間違いなく学校は改善されます。そのことが結果として「教員になるなら東京都だよ」「東京都の教員は働きやすいし、自分の力が発揮できそう」と若者たちが考えるようになれば、又は、ベテランで教員を目指す方も考えれば、東京都への教員志望者が増えて、教員採用者の倍率改善、優秀な教員の採用にもつながるのではないかなど、私は考えております。

以上でございます。

○中井教育長 それでは、教育委員の先生にも御意見をお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○北村委員 どうもありがとうございます。今、先生方から幾つも御教示いただいたと思うのですが、特に様々な経験やスキルを持ったOBの先生方をうまく活用するという、その活用というところが非常に大事になってくるのだろうなと感じています。先ほどのように、複数の学校間で共有するとか、あるいは、学校種を超えて共有するということになってくると一つの学校だけでできることではないでしょう。また、学校の中でも、今いろいろな先生にお話を伺うと、ベテランの先生方は授業に関連するところへのサポートよりは、業務的なサポートがほしいというような要望もありますし、若手の先生ですと、授業について指導してほしいというように、ニーズもかなり先生間でも多様だということを見ると、非常に学校運営が重要になってくるということを感じるのですね。

ですので、そこに対して、当然校長先生方も非常に御苦労なさると思いますが、工夫が必要

でしょうし、東京都としてもそこに対して、一つの学校に対する支援、それから、複数の学校に対する支援、学校種を超えた支援という形で、支援の在り方について、さらにこれからもし任用が増えていった場合に複雑化してくると思いますので、それは非常に東京都として検討していく必要があるなと強く感じました。

○中井教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○山口委員 ありがとうございます。最近、高齢者の方々を見ていますと、年齢を聞いてびっくりするのですね。私の見たところ 60 代かなと思ったら「いや、70 歳の誕生日よ」という。私が子供の頃の高齢者と、今の高齢者とでは本当に違いがある。65 歳といったら、まだまだ活躍していただけるという印象をすごく持っているの、今先生方からの御意見をいただいて、できることなら明日からでもやればいいのかというようなすごく印象を受けました。

また伺っていた中で、実際にされている例をお伺いすると、若い教員への指導、育成というところにも携わっていただいている。恐らく学校、大学もそうなのですけれども、皆さんそれぞれ忙しくて、ベテランの方はそういう使命は感じていながらも、実際には日々の自分の業務に忙しくて、若手の授業を見に行ったりとか、「こういった方がいいんだよ」というような指導には手が回らないというのが実際のところなのかなと思います。そういった意味では、非常に経験豊かな方々に指導していただくということは本当に双方にとってもいいのかなと感じました。

ただ、1 点、私も気をつけていますけれども、ジェネレーションギャップもあるので、上からがつんと、特に子供の前で「それはだめだ」とか言ってしまうと、これがまた子供はそういうのを敏感に感じて「若い先生はだめなのかな」というように、序列をつけられたりされてしまっても困ります。その辺だけはきっと十分注意されていると思いますけれども、そのあたりを踏まえた指導でもあったらいいのかなと思いました。

それから、もう 1 点、前の話とリンクするのですが、恐らく高齢になっていくと、OBの方々も地域で活動したいと思う方や、前任校は遠いと、よく知っているのだけれども遠いからちょっとねという方もいらっしゃる。そういう意味では、その方々も地域で、そしてもっといいのは、学校のことも知っておられるので、コーディネーターなども是非やっていただけるのではないかなという可能性を非常に感じた次第です。

ただ、先生方、大学のOBの先輩方もそうなのですけれども、教えるのが一番好きなのですね。ですから、教えるのはいいけれども、委員会とかそういう業務はやりたくないという方が

多いので、その辺は適性に合わせてということなのですから、伺っていた話からすると、いろいろな可能性が考えられて、できるだけ早くこれが実現することを願うばかりですし、教育委員会としても後押しをしていきたいなと感じました。

○中井教育長 ありがとうございます。今、ジェネレーションの話が出ましたけれども、学校を預かる校長先生方、その辺は気を遣ったり、工夫されている点はございますか。

○小山校長 確かに、御高齢の中には一方的に話をしたがる方もいます。ただ、意欲的な、生徒を育てよう、しっかりと育てていこうという意欲は十分お持ちで、共通性といいますか、方向性といいますか、この学校は何をするんだというところで方向性を一にしてくれれば、その悩みは多少、いやかなり減っていくのかなと思います。その動き方は、地域の方や保護者の方も当然それは感じますし、若手の先生方も感じます。

あと、授業改善でいうと、やはり今までの授業の在り方に固執してしまう方もいるかもしれません。そういう意味では、柔軟な発想の方のほうが当然いいでしょうし、若手の教員とのコミュニケーションがとれる方も重要だと思います。その中で、一緒になっていいものを作っていこう、生徒を育てていこうという姿勢を示していただけるといいのかなと。また、そのように、例えば「みんなで授業を見に行こうよ」ということを呼び掛けてはいるのですが、そういう雰囲気づくりといいますか、その醸成も私たちの仕事かなとも思っています。

○遠藤委員 先生方ありがとうございます。多分プラスがたくさんある、特に若手教員志望者にとって、東京都の教員になるとこういうメリットがあるなという御指摘、目からうろこと言えば、そうなのだなと思いました。ただ、私も企業経営をしている中で、特に東京都の場合には高齢者雇用をするとプラスメリットを頂けるといようなこともあって積極的にやっていたのですが、マイナスもあるのですよね。高齢者が、先ほど山口委員のジェネレーションの問題がありましたけれども、上から目線で元部下を叱るとか、そういうようなことも出てきてしまったりすると。これからは、そういう面もあるのだということを入れてこれを進めていく。要するに、現役の校長先生あるいは先生方を守るためのセーフティネットも工夫していかなければいけないのではないかなと、今ちょっとお話を伺っていて感じたところです。

○高橋校長 大事なことは、やはり学校の管理職がそういう方々の適性をどう活かすのか、どういうところでどういうふうにお力を発揮いただくのかということを考えて、やはり管理職がコーディネートをしなければならないと思っています。

ただ、私が御高齢の方々に期待しているのは、いい意味での教員文化の継承というのがなかなか難しくなっている。65歳を超えた方々は、いろいろな気持ちの上でも、いろいろな意

味でも余裕ができていれば、そういうものも若手や中堅、ベテランに対してもできるだろうなと。だから、今言ったように課題はあるかもしれませんが、そのいい部分を最大限やはり学校として頼りにしたいなと思っているところです。

○中井教育長 澤岡先生、何か御意見ございますか。

○澤岡氏 少し外れてしまうかなとも思うのですが、教員の皆さんというのは、教えるということに長けている、知識、経験を持っていらっしゃるというすばらしい、いわゆる普通のサラリーマンの方に比較して、とがった、秀でた才能がある方々で、その方々が、今までの本務で遠くに行っているのではなくて、地元の学校というところで活躍の場を見出せることは、恐らく自分の退職後、完全に離職した後のその後の人生を豊かにするためのソフトランニングの場としても、ある意味第二の居場所と第三の居場所の間の 2.5 の居場所というところの部になっていくのかなということを、先ほどから伺っていて思いました。

それから、もう一つ、管理職のマネジメントについて、正にいわゆるすごいキャリアを持っていらっしゃる方々が若手を圧迫しないようにというマネジメントも一つあると思うのですが、今もう一つ大きく広げると、雇用延長ということをめぐる中で、企業で起きていることとして、今まで営業でばりばりやってこられた方が雇用延長でちょっと事務の、いわゆる補助的なお仕事に回ったというときに「何で俺がこんなことをやらなきゃいけないんだ」と、モチベーションが非常に低下して、さらに元の部署のところに行って、若いのを呼んで「お前それで、それじゃ部長はだめだろう」みたいなことを言ってしまって、それで、企業全体がちょっと沈滞化するといった話も出てきています。

そういう意味では、そこで必要な一つの管理職の方の役割としては、たとえ自分が本当は授業をやりたいと思っていて、でも校務をお願いされた先生に対して、その校務というのは決して補助的な仕事ではなくて、この学校という場、それから、若手を育成するためにすばらしいことをあなたはやっているのだよという、ある意味評価とか動機付けということもしっかりとしていかないと、恐らくOBの方々は、1年やってみて「ああ、もうこんな補助的なことばっかりだったらやってられないよ」という話にもなる。やはり評価とか、そういったようなことも必要なのかなということを感じました。

○中井教育長 ほかにいかがでしょうか。

○宮崎委員 ありがとうございます。本当に納得する御意見がいろいろ出ておりますが、今の触りになる部分ですね。例えば、政治でもジェロントクラシー、長老政治の弊害などが言われたり、企業でも、今遠藤委員がおっしゃったようなこと等があると思うのですが。ただ、積み

上げてきた知見、業績が、ある日定年退職するとともにぷつんと切れてしまうもったいなさというのがあり、これを本当に、いかに活かすかというのが大事な点だと思うのですね。今まで、学校でのお話も出てきておりますように、学校を知っているという、これが一番大きな強みではないかと思うので、そこを最大限に引き出してもらいたい。

単に再任用で、手放しでいらしてくださいではなくて、役割をきちんと明確にして、例えば、メンターとしてこの学校でこういう仕事をしてください。若手というのを、これも学校によって違うと思いますけれども単に年数で6年とか10年とかではなくて、こういう傾向の先生方のメンターをしてください。あるいは、地域社会とのつながりのコーディネーター、先ほどから出ている放課後子供教室とかいろいろありますけれども、それも学校を知っているからこそできるコーディネーターが必要でしょう。元教員ということでしたら、これはもう立派に役割を果たしてくれると思うので、参加してくださいとか、職掌をはっきりとお願いして、向き、不向き、得手、不得手があると思いますので、授業をやってくださいもありますし、そういう枠組みというのでしょうか、その学校によって必要な分野というのも違うと思うのですね。いじめとか不登校に手厚く対応しなければいけない場面に遭遇している学校だったらそこをやってくださいとか、ある意味の専門性ですね。そういうことを割り振りながらお願いしていく。そうすると、役割意識も自他ともに明確になりますし、仕事をする御本人にとっても満足度というのが見える形で積み重ねられていくと思いますし、そういうことが大事なのではないかと、今思っております。

○中井教育長 ありがとうございます。

各学校で教員OBに非常勤で入ってもらおうということについては、非常に有用であるというお話であったかと思うのですが、現実の社会の中では、都教委も非常勤の教員については1年を通して常時募集をしているという状況であるわけですがけれども、なかなか手が十分に挙がってこないという、そういった現実もあります。その学校の需要に応じていくためには、それぞれの学校や教員のネットワークだけではなくて、それを全体でまとめて、より大きなストックにするような、そういった、いかに社会に埋もれている教員免許保有者に学校に戻ってもらおうかという、その仕組みづくりをしていかないと、需要と供給のギャップを埋めるということがなかなかできないということが、今後の課題ではないかと思うところです。

それでは、まとめを含めて知事から御意見を頂ければと思います。

○小池知事 ありがとうございます。若手の教員のなり手が大分少ないというのは倍率を見てみるとよく分かるわけではありますが、また一方で、若手の教員の皆さん、教える方と、それか

ら、保護者へのいろいろな対応をしなければならないというので、もうへとへとになる方がいらっしやるとか、そういう話も聞くわけであります。

ある意味、特に東京などの場合は、若干地方よりも結婚年齢が遅くて、親の年齢などよりも先生が若い、そうなってくると、なかなか先生として対応するのは大変なのだろうなど、想像するにそういうことなのではないかなと思います。

逆に言えば、それこそベテランの先生にそういう保護者の対応を担当していただくようなOBの方がいらしてもいいのではないかなと。そういう形で若手の負担の軽減をするというのも、ちょっと現実的に必要なのではないかなと思います。

よく「地震、雷、火事」と言いますけれども、最近はその最後の「おやじ」がいないといいます。また、かつて昔は、うちの母も学校の先生に「あなたはこうした方がいいですよ」などという、そういう指導を受けたりしていましたからね。今どうなっているのかよく分かりませんが、是非、そういう意味で、OBの先生方には、そういったことなどもお手伝いいただくというのも必要なかなと。とても現実的な話として有効なのではないかなと思います。

ですから、現役の教員と教員のOBの皆さんが業務を分け合う、言ってみればワークシェアリングというようなものを取り入れてみるというのも一つではないかと思えます。

それから、教員のOBの皆さんにとっても、教えるということがレゾンデートルでもあろうかと思えますので、先ほどの一番目の例と同じように、そういう場を確保する。そして、またそれをマネージする仕組み、これも最初の一番目のテーマと同じでございます。いろいろ工夫するという点など、今日は御議論いただいて、それをまた教育庁でしっかりと生かしていただきたいと思いますと思っております。

先生方も、本当にありがとうございます。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、以上で2番目のテーマにつきましても、ここで終了させていただきたいと思います。

今日予定のテーマは以上でございますが、この際でございますので、教育委員の方々、何か知事に、この際申し上げておきたいこと等、何かありましたらお願いします。

○宮崎委員 前回のこの総合教育会議では、AIをテーマにして、子供たちの読解力に関する衝撃的なデータを基に、読解力不足の課題が話し合われましたが、それを受けて教育委員会としては早速、対策のためのプロジェクトを立ち上げまして、実効性のある対応をしようということで、予算措置にも反映させるという方向性を今打ち出しているところです。

こうした会議で大変貴重なお話を学校を含めていただいた後、議論を議論に終わらせずに、スピード感のある形で施策化するためにも、是非予算措置をよろしくお願ひしたいと思ひまして、それをお願ひということで申し上げさせていただきます。失礼いたしました。

○小池知事 新井先生からのプレゼンテーション、A I時代の中で何が必要か御提示いただひて、本当に非常にためになりました。そういう流れはとても早いと思ひますので、特に今お話しございました予算編成に向けて検討してまいりたいと思ひます。どうもありがとうございます。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、以上をもちまして第2回総合教育会議を終了させていただきたいと思ひます。ありがとうございました。